



一般国道40号幌延IC改良工事の現場状況を説明してくれた野田さん

道北の天塩町～幌延町では防災対策として「一般国道40号天塩防災」事業が進められています。この事業の一環で、2019年2月から幌延IC改良工事が始まり、7月からこの工事現場に2人のベトナム人技術者が配属されました。ベトナム人の若手技術者の指導に当たりながら、現場を取り仕切っていたのが、稚内市にある錦産業(株)の野田真澄さんです。工期が迫る幌延IC改良工事の現場事務所に野田さんを訪ねました。

料理人志望を180度転換し、土木の世界へ

日本最北端のまち稚内市で生まれ育った野田さん。両親が共働きだったこともあり、小さなころから台所に立つことが多く、高校卒業後は調理学校に進学しようと考えていました。しかし、仲の良い友人の「これからは建設業が発展していく。一緒に建設業に携わらないか」という言葉が、進路を転換するきっかけになりました。調理学校に進学するなら、地元を出ていかなければなりません。地元に残りたいという強い思いから、「友人の誘いに乗ってしまった」と笑います。

そして、1981年春、北海道立稚内高等職業訓練校の二期生として入学し、測量や土木工学などの知識を学びました。1年間の就学は、スコップを持って肉体労働をすれば給料がもらえるというイメージを大きく変えました。「建設業は奥が深く、技術を要する仕事であることを痛感させられた」と言います。

職業訓練校を卒業後、稚内市内の建設会社に就職して16年ほど勤務しましたが、道外の現場が多かったため、親の入院をきっかけに退社し、別の建設会社に再就職します。ところが、その会社も2005年の冬に倒産してしまいます。当時は、公共事業が右下がりの時代。年末のあわただしいなかで倒産を経験したこともあり、先行きに不安を感じ、建設業の仕事を辞めようと考えようになります。しかし、倒産した会社と引きのあった錦産業の貝森輝幸社長（現会長）に誘われ、「やはりこの仕事しかない」と思いとどまり、同社に入社することになりました。

「紆余曲折はありましたが、建設業に携わってもう37年です。昔は、土木技術者として半人前にも満たな

い自分が現場を任されることもありました。発注先の監督員と協議しながら工事を進めていかざるを得ない状況で、必死だったことを今でも思い出します。道路の現場が多かったのですが、苦楽を経験していくなかで、土木技術者としての技量がそなわってきたように思います」と現場人生を振り返ります。

2人のベトナム人技術者の先輩として

野田さんが現場代理人を務めた一般国道40号幌延IC改良工事は、幌延町にある幌延インターチェンジまわりの一部区間を改良する工事です。軟弱な地盤を改良し、横断排水管を設置するとともに、ルートにかかる橋台を新設しました。

野田さんが国道40号の改良工事の現場に携わるようになってから4年になりますが、錦産業は国土交通省北海道開発局長から5年連続で工事成績優秀企業に認定されています。連続での認定は道内でも数社で、「次年度も認定いただけるように努力していますが、プレッシャーがあります」と緊張感をもって現場に臨んでいます。

さらに2019年7月から、この現場にチャン・ヴァン・ニャットさんとダオ・チョン・ギアさんのベトナム人技術者が配属され、野田さんは2人の指導に当たっています。

錦産業は、2019年4月に初の外国人技術者として2人を採用。3カ月間、札幌の日本語学校で日本語を学ばせ、すぐに現場に配属しました。

外国人技術者を採用すると聞いたときは、「一番の

不安は、言葉の壁でした」と野田さん。一方で、以前から人手不足問題を認識しており、「これからは、外国人技術者に助けてもらう時代になっていくと考えていた」と言います。

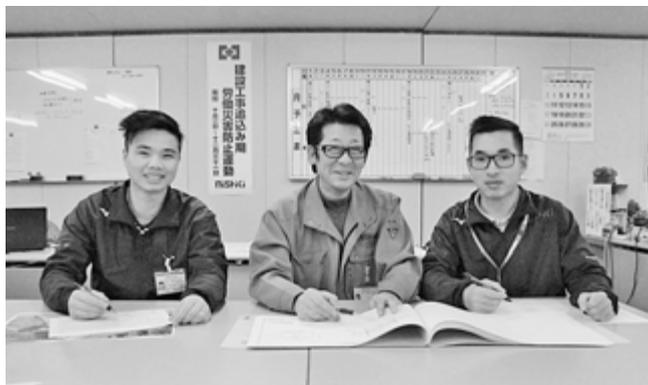
ベトナムの大学で土木を学んだニャットさんとギアさんに、野田さんが特に意識して指導していることは安全管理です。「労働災害を起こさない環境づくりが、この仕事の基本です。例えば、重機の周りで作業するときは、必ずオペレーターとアイコンタクトなどで確認し合って行動するなど、お互いに安全を意識しながら現場で動くように伝えていきます。忙しさで見落としがちな確認作業を忘れずに行うこと、常に冷静に行動する心構えが大切です」と話してくれました。

社会に活用されるものづくりを選んだ誇り

「一言に建設業と言ってもたくさんの業種があります。法律の知識も必要ですし、屋外の仕事なので1週間後の天候など、身近な環境変化にも気を配る必要があります。土木の難しさや厳しさを経験しながら今までやってきましたが、その難しさや厳しさを乗り越えると、仕事がおもしろくなります。そんなことの繰り返しで37年になりました」と、笑う野田さん。

日本の高い技術を学びたいとやってきたニャットさんとギアさんは、「優しく、熱心で、いろいろな仕事を教えてくれる、いい上司です」と声をそろえます。野田さんも「今後2人には現場を任せられるような人材になってほしいと思っています。工事に関わるいろいろな人たちの意見や要望を尊重することが、スムーズに工事を進める方法だと思っているので、発注者や協力会社とのコミュニケーション力も磨いてほしいですね」と期待を寄せます。

「みんなで苦労しながら試行錯誤し、反省と改善を繰り返して竣工を迎え、無事に発注者に引き渡す。どの現場も同じことの繰り返しですが、自分たちがつくったものが社会に活用されるという仕事を選んだことに後悔はありません」と言う野田さん。この思いは、きっとニャットさんとギアさんにも伝わっていることでしょう。



現場事務所でニャットさん（右）、ギアさんと打ち合わせ中の野田さん